

---

# カケメイキ！

鎌田六月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カケメイキ！

### 【Nコード】

N3505T

### 【作者名】

鎌田六月

### 【あらすじ】

神奈城悠が六本木に行きたくないと思っていた頃、抱えていた大量のワカメが爆散した。

それを機に彼女は未来に生まれる大きなエネルギーの動きが矢印状に見えるようになる。

一方その頃、黒澤明輝は付き纏う幽霊から必死に逃げながらこの世の下らなさを踊りで表現しようとするが、

ダンス部に入ろうと思ったのに担任の澤田先生の手違いで文芸部に入ってしまう。

文芸部のたった一人の部員、もとい部長が幽霊部員だったので黒澤明輝は途方に暮れていたが、ふとしたはずみで本棚の後ろにカプセルが隠されているのを発見する。

カプセルを開けると、その中から部長の川原成美が現れた。

彼女は意識が四次元の狭間を通り抜けるのを感じる事により、人間離れた反射速度を身につけていた。

神奈城悠は過去の友人を探し、偶然文芸部に足を踏み入れるが、そこに居たのは全く文芸活動をせずに囲碁を打っていた

黒澤明輝と川原成美の二人だった。呆れた神奈城悠は根本から文芸部を変えようとする。

辺野古高専の文芸部では、今日も刺身が冷蔵庫で冷やされている。現代社会を舞台とした、ちよつとアクションで哲学的な日常ストーリー！。

(この小説は「小説&まんが投稿屋」でも連載されています)

「カケメイキ！」

神奈城悠は六本木に行きたくなかった。どの位行きたくなかったのかというと、それはもう圧倒的な興味の無さである。生理的嫌悪感を超えた無関心である。トイレでカレーを食べたくないという感覚よりも、更に高度なものである。そもそも彼女は六本木とは何かを知らない。文字で書けばシンメトリーになる位の事しか知らない。何処にあるかも知らない。たまにドラゴンが生まれる事も知らない。従ってそこに行きたいという感情が生まれるわけも無い。そう、彼女は六本木の事など一欠片も考えていなかった。

彼女は大量の若布を抱えて国道を走っていた。勿論六本木の事など考える余裕も無い。

(高ぶる……高ぶるぞ……心臓が悲鳴を上げているのを感じる……)  
これでこそ人生である、と彼女は感じていた。人生とは、人の生きる様とは、全てにおいて全力でなければならぬ、それが神奈城悠の信条である。彼女は常に全力で生きてきた。受精卵の頃から彼女は活発に動き回っていた。幼稚園の頃、元自衛隊員のもも組担当篠田先生に憧れを抱き、その時から彼女は覚醒した。小中学生の頃には、無遅刻無欠席は当たり前、全ての行事に全力を尽くし、彼女のいたクラスは運動会と合唱コンクールで連続優勝を成し遂げ、成績も全て学年トップであり、通信簿は5の判子を連打され、伝説の生徒として母校西原西中学校に名を残す事となった。というのは大体嘘だが、彼女が常に全力であるのは本当の事だ。全力であるからこそ、国立辺野古工業高等専門学校に合格する事が出来たのである。今日、彼女は数学の課題をしている途中に、急に味噌汁が飲みたくなり、しかし常備品の中に若布が無い事に気がついて、寮の近くの業務用スーパーに走った。彼女の座右の銘は、『思い立ったが吉年

吉月吉日吉時吉分吉秒』である。そう考えた瞬間に、走り出さざるを得なかったのだ。

彼女が急いでいる理由は、急がなければ昼飯に間に合わないからである。現在十二時四十七分、レストランが閉まるのが十三時だから、飯に今辿り着いた所で昼飯を食べ終える時間は無いかもしれない。それでも彼女は走った。間に合うかどうか、そもそもそんな前提は彼女の頭に無かった。彼女は走るしか無かったのだ。そして、その時若布は彼女の頭の上でがしゃがしゃ揺れながら、事件の一部始終を眺めていた。

それと丁度同じ時、辺野古工業高等専門学校（略すれば辺野古高専、学生風に更に略するとへのこーせん）の文芸部部长は、宇宙研究同好会（通称ロケット同好会）の部室に呼び出されていた。

「私は少し急いでいるんだけどね」

文芸部部长、川原成美は、少し苛立ちながらそう言った。

「急いでいる、だと？」

宇宙研究同好会の会長、島田勝義も、また彼女の態度に苛立っていた。

「昼飯を食べたばかりだし、少し用事もあるし……出来ればさつさと済ましてほしい所だよ」

「冗談じゃねえ！ 文芸部が、俺達に何をしたのか分かっているのか！」

「何をしたかって？ 文芸部は今まで、言論の自由に則った活動以外に何かをした憶えは無いんだけど」

「あの記事も言論の自由に則っているのか？」

「あの記事？ 何の話だい」

「とぼけるんじゃないねえ！ お前ら文芸部が俺達の活動の批判記事を学校新聞に載せたせいで、俺達は同好会に格下げになったんだよ！ もう部費は貰えねえ！ 俺達が新しく開発していたロケットも一からやり直しだ！ どうしてくれるんだよ！」

「そもそも宇宙研究部なんてあやふやなものが部活として存在していたのがおかしいんだよ。それにやっている事はロケットの研究ばかり、しかも部費はがっぽり持っていくしね。そういうのは個人でやってくればいいんだ。それに対して文芸部は紙とインクさえあれば殆ど部費はいらぬ、環境的にも経済的にもエコな部活だ。どうだい？ 君も文芸部に入らないかい？」

「誰が入るかそんな陰湿な部活！ しかも部員はお前一人しかいないじゃないか！」

「だから、尚更入ってほしいんだけれどね」

「ふざけるな！ 第一ロケットは個人で作れるものじゃないだろう！」

「別に個人じゃなくてグループを作ったりしてもいいとは思うけど、わざわざ部活にする必要は無いと思うんだよ。辺野古高専内でロケットスーツを作っていた学生がいたけれど、あれも部活の活動じゃないだろう？ 我々高専生は、生徒じゃない。学生だ。自ら学び創造する力を求められている。同好会になった位で一々騒ぐ事も無いだろう。第一同好会で十分だと判断したのは部会の人達であって、私じゃない。文句があるならそつちに言ってもらいたい所だね」

「よくそこまでポンポンと言いつけが出てくるな」  
「保身は大事だよ。我々文芸部も何度同好会にされそうになった事か」

「文芸部の話はどうでもいいんだよ！ 俺達の要求は一つだ、次の学校新聞に謝罪文を載せる！ いいか、これは命令だ」

「ふーん……拒否したらどうするんだい？」

「このロケットを見ても、まだそんな台詞が出てくるのか？」

島田勝義は、部屋の奥のテーブルを指さした。

「あれは全て水ロケットだ。俺がこのスイッチを押した時、この部屋のロケット全てがお前に向かって飛んでいく。水ロケットをなめるなよ？ 至近距離で命中すれば骨ぐらいはもっていくからな」

「脅迫つて奴かい？ 全く文化系以外の部活は野蛮な考えの人が多いね、文芸部に入つて日常のよしなし事をそこはかとなく書き綴れば自然と平和な気持ちになれるのに…… どうだい、君も文芸部に入らないかい？」

「ぶっ飛ばすぞ」

「私を？ ロケットを？ どっちだつていいけれど、私は君の言いなりにはならないからね。いかなる時であつても、言論の自由が暴力に屈することがあつてはならないんだ」

「ふざけるな！ お前がするべき事は、宇宙研究部に対して謝罪文を書くこと、それだけだ！」

「話を振り出しに戻すね君は。帰つていいかな？ それともそのゴミを発射させてからにする？」

「ゴミだと？ お前、そう言ったのか？」

「ああそうだ。どんなに素晴らしい研究をしても、暴力的に使われるならそんな研究はゴミだ。むしろゴミの方が害が少なくてマシなぐらいだよ。手榴弾はゴミ箱に捨てられないからね」

「ふざけるな！ いいか、これが最後の忠告だ！ お前は俺達に対して謝罪文を書くんだ、はいかYESで答えろ！ 十秒以内に答えなかつたらこのスイッチを押す！」

「拒否権が無いじゃないか」

「そんなものを与えたつもりはない！ さつさと態度を決める！」

十、九……」

「カウントダウンなんかいいからさつさと押せよ。本当は躊躇っているんだらう？ 実は君も、暴力が何も生まない事ぐらい分かっているんだ」

「黙れ……！」

島田勝義はスイッチを押した。

それを見て、川原成美はクスリと微笑んだ。

盛大に水を撒き散らしながら、部屋の三方から川原成美に向かって、ペットボトルがはじけ飛んだ。

神奈城悠は胸騒ぎを感じた。食堂に向かって走りながら、自分の足が地球を蹴飛ばしているのを感じながら、とんでもないエネルギーに引き寄せられるのを感じながら、義務感から、使命感から、昼飯を食べたいという一筋の思いから、彼女はひたすら走っていた。

(何だ……この感触は……?)

自分は何から逃げているのか、もしくは何かを追いかけているのか？ そんな疑問すら頭の中を一瞬で通り抜けていく。彼女は、今感じている、意識のようなエネルギーのような、何かの存在に対して全く考える余裕が無かった。だがそれでも、とにかく彼女は、何かを感じているのを、強く意識していた。若布の袋を握る手を汗がつつた。靴下と指の隙間から湿気が通り抜けていく。全てが過ぎ去っていく。彼女から意識するものが抜け落ちていく。それはまるで、何かの存在を彼女に強烈にぶつけるためのよう……

神奈城悠は走るのをやめた。そして、若布の袋を見つめた。

「何なんだ……一体……」

その瞬間。

若布は爆散した。



「ふうん、この程度か」

川原成美はペットボトルを握り潰しながら、高らかに笑った。

「二十六発かな？ それで、当たったのが三発。その内、足をかすつたのが一発で、胸元で握りつぶされたのが二発」

「……」

「確かに予想よりは速かったよ。でもこれじゃあ武器にもならないね。精度も威力も、何もかも足りない。よくそれで人に向けて発射しようなんて考えが出来たもんだ」

「……」

「しかも幾つか窓を割ってるし、外に吹っ飛んでつたのもあったし……後先を考えないからそうなるんだ。あれがもし外にいた人に当たったらどうするの？ 責任取れるの？」

「っ……」

「まあ何だっかっていいけど。次からは自分より強そうな相手に偉そうな態度は取らない事だ。どうしたの？ 開いた口が塞がらない感じだけど……」

「畜生……！」

「他人に危害を与えておいて畜生もないもんだよ。むしろ畜生の方が無駄な殺生はしないからまだましかもしれないし。君こそ人間である事に意義を感じられるような生き方してるのかい？」

「黙れ！ 帰れ糞野郎！」

「最初から帰りたいつて言ったのは私んだけど……まあいいや。ありがとう、次の記事のネタが出来たよ。今から近くの先生呼んでくるから、それまでにその窓ガラスを何とかした方がいいと思うよ」

川原成美は散乱した窓ガラスを指さした。頂垂れる島田勝義。

「じゃあね、次はもうちょっとましな用事で呼んでね」

川原成美は教室を出るついでに、水口ケットの飛んでいった窓を

覗く事にした。

（国道まで行つてたら車に当たつてる事もあるかもしれないな、そうなつたら大事件だ……まあいいや、ネタになるし、水ロケットにそこまでの威力があれば会長も浮かばれる事だろうし……あ、死んでないか）

しかし窓を覗き込み、その水ロケットが生み出した結果を見れば、流石の世界最強の文芸部員、川原成美であろうとも、その衝撃を言葉にせずにはいられなかった。

「若布だ……」

神奈城悠はあまりの衝撃に、言葉が出てこなかった。決して彼女自身のボキャブラリーの問題ではない。この状況を言語で表現するのは不可能と言つてもいい位に、脳の判断能力を超えるエネルギーが一瞬にして通り過ぎ、そして形容しようのない、圧倒的な超現実が、彼女に降り注いでいたのだ。

「若布だ……」

そう、若布である。それは誰の目にも明らかで、最初から分かっている事だ。

現実が想像を超えたときには、人は手元の現実的な現実を確かめながら、想像に現実を合わせていくという作業をする。そうしなければ自我は崩壊してしまう。現実は本来、想像を超えてはならないものなのだ。想像には制約が無いが、現実には制約がある。重力には従わないといけないし、法律を守らなければ生きていけないし、飯を食べなければ死んでしまうし、若布のない味噌汁は食べたものではないし……そう、想像は本来現実を超えた部分にあるものなの

である。この場合の現実に生まれた爆散した若布は、確かに世界のルールとしての制約を超えている訳ではない。しかし、そういう事ではない。そこが問題では無いのだ。目の前で、手元にあつた若布が爆散するという事。この超現実的な現実だけでは、神奈城悠の自我を狂わせる事は無かつたかもしれない。

若布が爆散した直後……彼女は、舞い散る若布を眺めながら、狂いそうになる自我を押さえつけながら、奇跡的にも、辿ることのできる現実を手繰り寄せた。彼女は、爆散する若布に目を奪われながらも、あるものに気がついたのである。その正体が水口ケットであると、彼女は気付かなかつたが、しかしそれでも、自我を保つためには、それが若布を爆散させた原因である事に気付く事が出来れば、それで充分なのだった。

彼女は若布が爆散するのと殆ど同時に、彼女の右から、何かがぶつかる音を聞いた。硬いような柔らかいような、重いような中身の詰まっていないような、それはまだ彼女の聞いた事のない音であったが、少なくとも彼女は、それで粗方今の状況を理解した。彼女の想像と現実が、やっと繋がつたのだ。現実が想像に包括された。若布が爆散してから僅か0.8秒の事であつたが、彼女がその瞬間、安堵したのは間違いない。

しかし、再度、現実が想像を凌駕した。

(何だ、これは……！)

矢印だった。

それはとても大きな大きな矢印だった。

水口ケットの飛んできた方向から、彼女の手元を通りすぎて、道路で跳ねて、男子寮まで続く矢印。

エネルギーの軌跡。

水口ケットのエネルギーの軌跡が、視覚化されて、矢印となって。それは確かに、現実に存在していた。

彼女の手元を通り過ぎたロケットの軌跡が、矢印となって目の前に現れている。

まさに奇跡だった。

神奈城悠がやっとの思いで辿り着いた現実的な現実は一瞬にして崩壊させられた。

それはあくまで、彼女の作り出した仮想的な現実だったのかもしれない。

それでも彼女は、上書きされた現実には自我が揺らぐのを感じた。それはあくまで、偶然の事だったのかもしれない。

それでも彼女は、それを必然であると信じるより無かった。

「何故」を超えた、理解を超えた、自我を超えた、想像を超えたものが、目の前にある。

それが例え信じられなくとも、彼女は無理矢理それを信じるより無かった。

自分の信じられない世界では、自我を保ち続けられない。彼女はそうして乗り切った。

エネルギーが矢印として見える世界を、現実として認めるしか無かったのだ。

それは選択肢としては最善だったし、運命としては最悪だったけれど、それでも彼女は、崩壊された自我を、想像を超える現実を新たに現実として上書きする事で、復活させたのである。

そして、現実には重力という制約がある。

爆散した若布は重力に導かれ、辺野古高専の入口近くに撒き散らされた。

そして、重力とは全ての物質に普遍的に働く力である。

彼女の自我が崩壊してから約2秒後、水ロケットから放出された水が、彼女の周りに降り注いだ。

若布が増えた。

「なーんじゃこりゃー……」

窓の外から、じわじわと増える若布と、若布に覆われて腰の抜け  
ている神奈城悠を見て、川原成美はそう呟いた。

「大事件だね、事件と呼べる代物では無いかもしれないけれど」

そう続けて、彼女は廊下を歩きだした。

「記事に出来るかなー」

その後、水口ケツトの撒き散らした水のせいで、一瞬だけ虹が  
来たのだが、それを見た人はいない。

辺野古高専のレストランで寮食を食べて、それから寮に戻る時、大抵はM棟と寮を結ぶブリッジを渡る必要がある。ブリッジは女子寮のA棟と男子寮のB棟との間に位置する、C棟の五階へ繋がっている。階段を下りて寮の一階から入る方法もあるにはあるのだが、ブリッジを通るのに比べて大分遠回りをする必要がある上に、信号の無い横断歩道を横切らなければならぬため、余程の物好きか、ブリッジの近くの売店で買った飲み物をゆつくりと飲み干したい人が、近くのコンビニに寄ってから帰る人以外は、まずそんな事をする人はいない。黒澤明輝も、雨のせいで自動ドアのICチップ読み取り機が壊れた時以外は、校舎からブリッジを使わずに寮に帰った事は無かった。

今日は、黒澤明輝はブリッジの手前で、売店で一番人気の杏仁豆腐味の炭酸飲料ペド・パークッターを飲んでいた。半分ほど飲んだ所で、ふと思いついたように、自分の後ろの陰に呟く。

「あの学生証に入ってるICチップを読み取る機械って、正式名称は何て言うんでしょうね」

彼の後ろには誰もいない。しかし答えは返ってきた。

(知るか。そういうのは情報か機械科に聞け)

はたから見れば黒澤明輝は独り言を言っているようにしか見えない。しかし確かに、黒澤明輝の意識の中で、質問に対する素っ気もない答えが返ってきた。それもいつもの光景であり、黒澤明輝は他人によく独り言が多いと言われているが、少なくとも彼自身の意識に内在する理解者がいるために、彼自信は独り言が多いと言われるのを苦にしていない。ただし彼の声に答える側の存在は、いつも(少しは空気を読め)と言っているが、その声もまた他人には届かないために、気にしているのは彼の声に答える存在だけなのだ。

「メディアはそういうの詳しくないんですか」

（それも知らん。詳しくないのは私だけかもしらん。でもそういうのは多分組み込みとか制御系の話だろ、メディア生には興味の薄い分野だろうよ）

辺野古高専には四つの学科がある。情報メディア工学科、情報通信工学科、システム機械工学科、バイオリソース工学科の四つがそれだ。専攻科まで行くと更に名前が変わるらしいが、そこは人外魔境、魑魅魍魎、暗黒世界の一步手前であり、まともな人間では目を合わせる事すら許されないといい、化物ばかりの住む世界であると噂されているため、黒澤明輝はそれについては何の情報も持ち合わせていなかった。入ったばかりの二年生には仕方のない事であるとも言える。

勿論こんなに長い学科名をそのまま呼ぶ辺野古高専生はいない。情報メディア工学科と情報通信システム工学科は、どちらも「情報」と略されている。普通辺野古高専で「情報」と言ったら情報通信工学科の方だ。その理由は単に情報通信工学科の方が「情報」というフレーズがしっくりくるからである。この二つの学科は混同されやすい。受験生にも、どちらが何をやっているのか違いがよく分からず、どちらを第一志望にするかで悩む人が多く、辺野古高専公式サイトのよくある質問コーナーで「情報メディア工学科と情報通信工学科の違い」が最も多いアクセス数を示しているそうだ。単純に言うてしまえば、情報メディア工学科はソフトウェアを扱う勉強、情報通信工学科はソフトウェアを作る勉強をする事が多い学科だ。どちらもプログラミングを学ぶが、情報通信工学科は座学が多めなのに対し、情報メディア工学科の方は実際に何かを作る事が多い。一年生の最後の課題で、情報メディア工学科生である黒澤明輝は「言語を使って、キーボードで自機を動かす敵を避け続けるシンプルなゲームを作った。また、情報通信工学科はハードウェアについての勉強をしたり、情報メディア工学科は映像や音声を加工したりというような、学科独自の全く異なる勉強をしているのだが、それでも

辺野古高専の中ですら、情報通信工学科と情報メディア工学科は若干存在意義が被っていると考える人が多いのは事実である。情報通信工学科と情報メディア工学科の敵対意識は尋常では無い。どちらも常に新入生の志望者数やテストの平均点の違いなどを気にしている。システム機械工学科は「機械」と略され、圧倒的な筋肉&坊主頭率を誇り、情報とメディアの二つの学科を軟弱者の集まりとして意識すらしない。それを更に上から見下すのが、辺野古高専の殆どの女子生徒を取り込むバイオリソース工学科、通称「バイオ」である。全ての生徒が、自分の学科こそが辺野古高専の楽園であると信じ、就活が始まるまでの数年間を、死なない程度に生きていくのだ。「まあいいです、多分会話に出す分には『読み取り機』で充分通じるでしょうし」

（それで満足してしまうのがメディアがダメメディアと呼ばれる所以だろうが。高専生としてそれでいいのか）

「あなたも高専生でしょ、というかあなたもメディアだったでしょう」

（死んだら高専生もメディアもねえよ、何だって死んでまであの読み取り機の名前を知らないといけないんだ）

「だって篠田さんは、現世に未練タラタラだから、まだこの世にいるんでしょう？ こういう疑問には興味は湧かないんですか」

（死んだら以外にどうでもよくなるもんだ。お前も幽霊になったら分かるさ）

「そうですね、別に幽霊になるつもりはないですが」

（死ねよ。意外に気持ちいいぞ）

「嫌です。私は多分、篠田さん以上に……この世に未練がありますから」

（そうか、なら仕方ないな）

「どうせ、私は天国に行けるような人間でも無いですし」

（しけた事言うなよ、幽霊じゃないんだから）

「篠田さんは幽霊の癖に、幽霊らしい事をあんまり言いませんね」



(私以外の幽霊を知らない癖に、よくそんな事が言えるな。死んだ人間の恨みは凄いぞ)

「へえ……知りたくもありませんね」

黒澤明輝はペド・パークッターを飲み干した。

その時、ブリッジを世界最強の文芸部員、川原成美が通っていた。自然に黒澤明輝は彼女にフォーカスを合わせ、彼女のワイシャツに全力でズームインする。それは男として生まれた以上、避けようのない事だった。黒澤明輝は数分前に彼女に何があったのか知る由は無い。しかし彼女が全身びしょ濡れであり、そして彼女の上半身がワイシャツであり、さらに彼女がそれなりに美人であった以上は、男として生まれたならばワイシャツから透ける下着に目を合わせる以外にやる事は無い。

(例えば、生前好きだった男がいたとしたら、女の幽霊は大抵その男が他の女に目を奪われる度に、呪いやなんやらのエネルギーを降りかけるね。殆どの幽霊はそんな事ばかりやってるよ)

「まさか篠田さん、私に何かしてませんよね」

(馬鹿野郎が。まるでこの私がお前なんかに未練があったみたいな缶を直角に傾け、最後の一滴を喉に落としてから、黒澤明輝はブリッジに入った。

「そうじゃないんですか？ だったら何で私にだけ篠田さんが見えるんですか」

(知るか！ そんな事こそ、高専生やらメディア生やら関係なしに、私を知る訳もない事だ。地獄に行つて閻魔様にでも聞いてみる)

「でも、未練がある事が他にあるのなら、別に私に付きまとわなくてもいいと思うんですよ。両親とか、友人とか、他にも会いたい人は沢山いるでしょう。何で後輩の私なんですか」

(そんなん知らん！ 別にお前に未練がある訳じゃない、勘違いするな馬鹿野郎！)

「……何で私が怒られてるんですか」

(癪に障るような事を言つたからだ)

「まあいいですけど……別に邪魔にはなっていませんし。少しプライバシーが失われた気がして十六歳の男子生徒としては妙に辛いものがあるんですが」

（我慢しろ、その位。それより、さっさと部屋に戻って囲碁の続きを打とうぜ）

「はいはい。まああの碁は既にもらったようなもんですけどね」

（馬鹿言うな、まだ形勢不明だろうが）

「篠田さんは口だけは妙に強いんですね」

（お前に言われるのだけは心外だな）

「どんな煽りも勝勢となれば、その手は桑名の焼き蛤ですよ」

（使い方が間違っていないか？）

「一人で随分賑やかだなあ……妄想癖が強いのかな、だとすると文芸部にびつたりだ」

川原成美はそう呟きながら、部屋に戻ったらとりあえず洗濯からする事にしようと決めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3505t/>

---

カケメイキ！

2011年5月19日23時10分発行